

2021年7月18日 聖霊降臨節第9主日礼拝

メッセージ「ミカル、怒る」

岡嶋千宙伝道師

聖書 サムエル記 下 6章 16, 20-23 節

今回の主役、ミカルは、聖書の中で『サムエル記』と『歴代誌』においてのみ名前が記されていますが、そのほとんどで「誰かに属する女性」として紹介されています。多くの箇所で行われているのは「サウルの娘」で、それ以外に3度「ダビデの妻」として(サムエル記上 19:11, 25:44, サムエル記下 3:14)語られています。そう明示されていないところもありますが、その場合でも、ミカルは、当然にどちらかであることが想定されています。サウルとは、イスラエルの初代の王であり、ダビデとは、そのサウル王の家臣で、後に、サウル亡き後、イスラエルの最も偉大な王となる人物です。どちらも王であるサウルとダビデの娘、または妻という肩書きからすれば、ミカルは、王女／プリンセスとして、また、王妃として、さぞかし立派で、何一つ不自由ない生活を送っていたのだろうと想像したくもなります。ですが、そうではありません。聖書の記述に基づけば、ミカルは、王位に座する二人の男性サウルとダビデの権力争いに翻弄された波瀾万丈の人生を送ります。

ミカルの父サウルは、自分よりも多くの功績を収めるダビデが、王としての地位さえも奪い得る存在であることを恐れ、ダビデの失墜を狙って策略を案じます。その一環としてミカルを利用し、ダビデを殺害しようとするのですが、結果として、その策略は失敗に終わります。サウルの思惑に反してダビデは生き残り、しかもミカルとダビデは結婚することになったのです(サムエル記上 18:20-30)。表向きの結末だけを見れば、ミカルにとっては良い結果であったとも言えるかもしれませんが。しかし、結婚によってミカル個人の幸せが確保されたのか、と問うならば、疑問符がつきます。なぜなら、サウルは、自分の娘の夫であるにも関わらず、ダビデを再度殺害しようと企て(サムエル記上 19:9-17)、さらにそれが失敗に終わると、強制的にダビデとミカルとの間を引き裂き、ミカルを別の男性と結婚させるからです(サムエル記上 25:44)。ダビデとミカルとの婚姻関係は、政治的戦略にどっぷりと浸かったものであったことが分かります。

ミカルを政治的野心のために利用したのはサウルだけではありません。夫となったダビデも同じでした。ダビデは、サウルの死後、別の男性と結婚していたミカルを取り戻そうとしますが、その際、「サウルの娘」を自分のもとに連れて来い、と相手方に迫ります(サムエル記下 3:13)。別の男性と結婚していたとはいえ、ミカルとダビデの婚姻関係が終わったとは記されていませんから、ダビデにとって、ミカルはまだ自分の配偶者であったはずで、それなのに、ミカルを「サウルの娘」と呼んだのは政治的な思惑があったからだとして推測できるでしょう。サウルの死後、本

来は王位継承権を持たないダビデが、王として君臨するために、王の娘であるミカルを自分のもとにおいておきたかった。ミカルとの婚姻関係を通して、サウルを継いで王となることが正統であるとアピールしたかった。そんな思いが見え隠れするのは。サウル、ダビデという二人の男性の政治的駆け引きに巻き込まれ、彼らの意図や企ての中で動かされ、生き方を左右される。ここまでの話からすると、受動的で、自分の意思を持たない女性、という印象を与えますが、そうとは言い切れない一面をも持ち合わせているのがわたしたちの主人公ミカルです。

先ほど、ミカルは、サウルの策略を通してダビデと結婚させられたとお伝えしましたが、それよりも前に、ミカルはダビデを「愛していた」と言われています(サムエル記上 18:20)。「愛する」という動詞(アーハブ)は、旧約の中では、もっぱら、男性が女性を愛する、もしくは神が人を／人が神を愛するという場合に用いられます。女性が男性を愛するという記述はごくわずかで、創世記において母リベカが次男ヤコブを愛したという箇所(創世記 25:28)、および雅歌において女性が男性を「愛しい人」と呼ぶ以外では、唯一ミカルだけが男性に対する愛を表す人物とされているのです。旧約の中で名前が記されている女性でただ一人、自分の子ども以外の男性を愛したと言われるミカル。そのミカルは、ダビデと結婚したあと、サウルがダビデに対するねたみをますます募らせ、ダビデの命を狙おうと企てた際、機転を利かせてダビデを守ります。かつては、一家の長であり、その当時もまだイスラエルの王であった父サウルに、ミカルは真っ向から対立するのです(サムエル記上 19:9-17)。

そして今回の箇所。ミカルの父であり、イスラエルの初代の王であったサウルが死んでから数年後、サウルの次の王の最有力者として、ダビデが台頭していった時です。ダビデは、かつて、神がモーセに十戒を刻みなさいと命じた石板が収められている「神の箱」を、自分の出身地であるエルサレムに持ち運ぼうとします。この神の箱とは、神が人々と共に歩いていくことの象徴であり、その箱があることにより、戦いにおける勝利がもたらされると信じられていたものでした。それほどまでに大切な「神の箱」を、ダビデは、自らの手で、自分の町に、しかも大勢の人たちが見守る中で、持ち運ぼうとするのです。多くの人たちの目の前で、神の箱を運び、その喜びのあまりに跳ね踊っているダビデの姿を見て、ミカルはダビデを「心の底から嫌」(サムエル記下 6:16)います。そして、6章 20 節に綴られている言葉。わたしなりに訳し直します。

「今日のイスラエル王はなんと栄光にみちていたことでしょう。家臣に仕える女性たちの前で裸になられたのですから。それは、まるで卑しい者たちの一人が恥知らずにも裸になるようなものでした。」(私訳)

なぜ、ミカルがこの言葉を発したのか、聖書には明示されていませんが、様々な憶測がなされています。例えば、ダビデがミカル以外に、多くの女性たちを妻や仕え人として迎え、その女性たちとの間にたくさんの子どもを設けていたこと(サムエル記下 3:2-5、5:13-16)に対する怒り、あるいは、ダビデが神の箱を持ち運ぶ際に、自ら祭司としての役割を担い、奏楽や踊りにより神を求めるという反イスラエルの祭儀をしたことへの批判、さらには、父サウルに代わり王座を略奪し、王位の正統性をアピールするダビデに対しての、サウル家の一族としての反発、などです。

おそらく、そのどれもがミカルの思いだったのでしょう。そして、もう一つ、別の思いがあります。ミカルは、この場面で、ダビデを個人名で呼ぶのではなく「イスラエル王」という抽象的な呼び名で呼んでいます(サムエル記下 6:20)。これは、先ほど見たように、サウル亡き後、着々と権力を手中に収め「イスラエル王」になろうとしているダビデを揶揄する、ミカルの個人的な批判、ともとれなくはありません。ですが、6章23節の「ミカルには、死ぬまで子どもがなかった」という記述と併せると、ミカルのこの批判が、単にダビデに向けられたものではなく、王制全体に向けられたものであったことが示唆されるのです。

聖書協会共同訳では「子どもがなかった」とありますが、原文を忠実に訳すと、ミカルは「子どもを持たなかった」となります。ミカルが「子どもを持たなかった」ことの原因。一つには、ダビデが、サウル家から王位継承者を出さないように、ミカルを遠ざけて子どもを産ませなかった、ということが考えられます。あるいは、王に最も相応しく「神が共にいる」ダビデを批難したがゆえに、神がその罰としてミカルに子どもを持たせないようにした、ということも考えられます。ですが、「子どもができない」のではなく、「子どもを持たない」と言われていたところに、ミカルの意思が反映されているように思えます。つまり、ミカルは、自らの意思で、望んで、子どもを持たないという選択をしたのです。

ミカルにとって、子どもを産まない、跡取りを持たないということは、極めて危険です。子どもがいないことは、イスラエル民族の祖先であるアブラハムの妻サラの時代から、新約の時代の洗礼者ヨハネの母エリザベトに至るまで、共同体から疎外される要因となるものでした。当時の女性にとって、最も避けるべきことの一つであったことでしょう。それなのに、あえて、ミカルが「子どもを持たない」ことを選んだとしたら、それは、ダビデに対しての個人的な反発というだけではなく、より強い思い、より固い決意があったからなのだと推測されます。

その決意とは、社会が大きく変化していく中で作り上げられていく流れ、多数の、あるいは有力な者たちが求める王制というあり方自体に対しての抗いです。たとえそれが多くの人々の求めることであっても、一人の人が犠牲になり、命が

削られ、声が消され、存在がないものとされていくことに対して、ミカルは抵抗の姿を示したのです。

その抵抗は、王制の精神的／靈的支えである主ヤハウエという存在に対しても向けられたのでしょう。サムエル記に記されている主ヤハウエとは、この書の編集者の、あるいは、編集者たちが資料として用いた古い伝承に体现される宗教観に裏打ちされた「神」でした。それは当然に、当時の社会で大きな力を握り、社会の中心にいて社会の形をつくり出していた家の長、一族の長、つまり男性たちの思い描く神の姿でした。ダビデが、ミカル以外にも多くの女性との間にたくさんの子どもを残したとされるのも、それが当然に、「神に選ばれるべき、男らしく勇敢な王としてのあるべき姿である」、との人間観／宗教観が反映されているからです。

ミカルは、抗います。自分自身を含めた女性たちを、王制にまつわる政治的駆け引きに巻き込み、一人の人間としての存在を忘れさせるあり方を否定するのです。社会の中心にいた男性たちが描く物語を退け、自分たちの思いとは別のところで人を縛りつける「神」という枠を振り払います。そして、自らの意思と声と存在とを持って、真の神を、一定の属性を持つ人たちによって担がれ、大きな場にでんと座る神ではなく、一人ひとりのそばで、共にいてくれる神を、探し求め、見出そうとしたのです。

時を経て、21世紀に生きるわたしたち。人類がこれまでに経験したことのない大規模なパンデミックと、それに起因する甚大な被害、そして世界全体を覆っている閉塞感。社会が大きく変わろうとしている今、ミカルの時と同じように、力を有する者たちの言葉が響き、個人の犠牲があたりまえとされるような流れができつつあるように感じられます。ですが、あの時と決定的に違うことがあります。神の独り子と呼ばれ、新しいユダヤの王として歓迎されながらも、社会の大きな流れに乗るのではなく、今ここで、共に、隣にいる人、そばで息をして、近くで命の火を灯している人、その人たちの声を聴きとることに、そして、その人たちの声に併せて、抗いの声を高く、高く、響かせることに、自分の命をかけた人がいる。社会から見放された者、病を負っている者たちに寄り添ったその人。許されない罪をおかしたとされる女性、悪霊に取りつかれているとされた女性、交わってはいけないと嫌われていた外国の女性と共に歩んだその人。そして、復活の間際、自分が葬られていた墓の横で泣き崩れる女性に、「誰かの娘」、「誰かの妻」という呼び名ではなく、彼女の名前で「マリア」と呼びかけたその人イエスがいることを(ヨハネ福音書 20:16)、わたしたちは知っています。ミカルが抗いながら求めた神の姿は、そのイエスにおいて体现され、そしてイエスを通して、わたしたちに示されているのです。

主イエスに倣い、わたしたち一人ひとりが、耳を澄まして、隣人の声を聴いて、共に抗いの声を上げていくことができるように。